

---

# 大東亜戦争～未来からの使者～

鶴翼陣形

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大東亜戦争〜未来からの使者〜

### 【Nコード】

N4364M

### 【作者名】

鶴翼陣形

### 【あらすじ】

西暦2115年日本は米国の第51番目の州として併合されていた。しかし、それを変える為に立ち上がった者達がいた。日本の崩壊の引き金となった大東亜戦争における日本の敗北を阻止するため未来から来た者達が大東亜戦争に介入する！！

## プロローグ（前書き）

この作品は作者の初投稿作品となりますので至らないところあると思いますが温かい目で見ただけなら幸いです。

## プロローグ

### プロローグ

- - 西暦2115年米国第51番日本州某研究所 - -

菊地「遂に完成しましたね扶桑博士。此れで計画を始めることができる!」

青年の研究員である、菊地が興奮気味に言った。

扶桑博士「嗚呼、此れで日本を救う事ができる。」

扶桑博士と呼ばれた、初老の男性は静かにそれでいて威厳ある声で応えた。

菊地「早急にこの事を研究所内にいる同志全員に伝えましょう。」

扶桑「そうだな直ぐ、全館内放送に繋げてくれ。」

菊地「分かりました!」

そう言つて菊地は嬉しそうに放送室に駆けていった。菊地「研究所内にいる全ての同志諸君に扶桑博士からの話がある。手を止めて聞いて欲しい。」

扶桑「皆、時間がないから手短に話す。たった今時間跳躍機が完成した。此れで我々は兼ねてからの日本再興計画を始めることができる。その為、三日後の正午に時間跳躍し、12月1日の御前会議に我々は跳躍する、その為向こうの世界に持っていく資料や持ち物の最終点検とこの研究所の破棄の準備を始めて欲しい。我々の祖国で

ある日本が米国の州として併合されて85年流浪の民とまで蔑まれ、それでも耐えてこれたのは今日という日を迎える為であり、日本再興を成就するその日を迎えるまで我々は闘って行かなければならない。だから、君達同志諸君には最後の最後まで私に着いてきてほしい。以上だ。」

扶桑博士の演説が終わった途端研究所内から割れんばかりの歓声が沸き起こった。ある者は拳を突き上げて喜び、ある者は涙を流して喜び崩れ落ち、ある者は万歳三唱を叫んだ。

菊地「皆、凄い喜びようですね博士。」  
菊地が感慨深く言った。

扶桑「当たり前だろう、皆この日をどれ程待ちわびたことか、だが本当の戦いはこれからだ、向こうの世界の方々が我々を受け入れてくれるかどうか。いや、弱気になってはいけけないな、直ぐに準備に取り掛かってくれ菊地君。」

迷いを払拭するように扶桑は菊地に向けて命令した。菊地「分かりました博士。」  
「そうして、菊地は勢い良く研究室から駆け出して行った。

扶桑「嗚呼、私は歴史を変えろという神にも等しい行為をしようとしている。もし、同志達や向こうの世界の人々に感謝されようとも私はこの計画が終われば罰を受けなければならぬ。」

そう決心した扶桑の顔はどこまでも晴れやかだった。

この者達が変わる日本がどうなるのか、それこそ正に神のみぞ知ることであった。

## ブローグ（後書き）

御意見・御感想を頂けると嬉しいです。

## 接触（前書き）

よろしく願います。

## 接触

- 三日後出発日の正午 -

扶桑「皆、もう後戻りはできないぞ。この計画から降りるのなら今の内だ。」と扶桑は出発するメンバーに向かって言い放った。すると菊地が前に出てこう言い放った。

菊地「博士、我々は日本再興を成就するその日を見届けるまでこの計画をやり抜くと全員で誓ったはずです。今さら降りるなんて真っ平ごめんです。なあ、皆！」  
全員「ウオオオオオオ！」と雄叫びが上がった。

それを見ると扶桑は満足したように頷くと全員の雄叫びに負けない程の声で言い放った。

扶桑「では行こう！我々の祖国の取り戻す為に！！」  
そう言うのと時間跳躍機を作動させた、彼らの姿が消え失せた後、研究所は一切の痕跡を残さず爆発した。

- 接触 -

- 1941年12月1日御前会議室内 -

会議室内は重苦しい雰囲気に包まれておりその中にいる者達もピリピリとしている。



「最早、米英蘭との開戦は避けられぬのか？」と発言したのは昭和天皇陛下である。

「はい、開戦は避けられません、既に我が海軍の機動部隊が真珠湾基地に向けて行動しております。」と海軍軍令部総長永野修身大將が応えた。

「既に我が陸軍も南方作戦を発動するために軍を展開しております。」と言ったのは東條英樹首相兼陸軍大臣である。

「そうか。」と言って天皇陛下が瞑目した瞬間、会議室内がいきなり白い霧の様なものに包まれ、居並ぶ者達が動揺しているところに場違いな声が聞こえてきた。

菊地「痛たたた。博士着いたみたいです。」と青年の声が聞こえてきた。

扶桑「嗚呼、そうだ！」と扶桑が応えようとした時。

「貴様ら！何者だ！何処から現れた！」と叫んだのは東條首相だ。扶桑「お待ち下さい。我々はあなた方を救う為にやってきたのです。」と応えた。

東條「我々を救うだと！どういうことだ！」

扶桑「落ち着いて聞いて下さい。我々はこの大東亞戦争における日本の敗戦救う為に未来から来たのです。」

東條「なっ！そ…そのようなよまいごとを信じるとでも思っているのか！」と机を激しく叩いて叫んだ。

扶桑「今から我々が未来から来た証拠をお見せします。まずはそれを見ていただきたい。」

扶桑はカバンの中から丸い球体を取り出した。

東條「何だ、それは。」幾分落ち着いた声で東條が聞いた。

扶桑「これは、立体映像投写機と言う情報を大量に持ち運べなかつ、映像を空中に映し出す機械です。準備も終わりましたので早速

始めましょう。今からあなた方に見せる映像は全て事実です、目を反らしたいと思うことがあるかもしれませんが、どうか最後まで目を反らさずに見ていただきたい。」

こうして、立体映像投写機が映し出した映像は日本軍の初戦での勝利から始まった。真珠湾奇襲の成功、マレー半島の快進撃、英東洋艦隊の撃滅等が映し出された。御前会議にいる全ての者達の顔は輝いていた。

が、天皇陛下だけは只じつと映像を見つめていた。

東條「これを見る限り我々を救う必要は無いと思うが？」とその声には余裕がみられた。

扶桑「これは前半部分です。今より後半部分が始まります。」と静かに応えた。後半は熾烈を極めた。

ミッドウエー海戦における大敗北、ガダルカナル島における消耗戦、ラバウル航空戦、マリアナ沖海戦、レイテ沖海戦、沖縄海上特攻作戦、神風特別攻撃隊、悲惨な沖縄地上戦、日本軍の各戦場での玉砕、さらにはB-29による日本本土の大空襲、ソ連の満州侵攻、そして広島・長崎への原子爆弾の投下最後は昭和天皇陛下によるポツダム宣言受託の玉音放送で映像は終了した。

この映像が終了した時、室内にいる者は皆涙を流していた。

扶桑「これで、我々が未来から来たことを信用していただけですね？」

東條「嗚呼、信じよう。信じるとも、これを見せられてどうして信じないと言えようか！」と涙声で言い放った。

扶桑「次は戦後の映像です。こちらは西暦1945〜2000年までの日本の復興の映像です。」

そう言う映像が始まった。

それは、悲しみに打ち拉がれた彼らにとって嬉しいばかりの映像だった。

湯川秀樹のノーベル賞の受賞、高度経済成長における日本の経済大

国化、一億総中産階級の達成、さらには世界でもトップクラスの技術大国化等が上げられた。この映像には全員が口をポカンと空いており、驚きに目を見張っている。そこで今まで黙っていた、嶋田海軍大臣が口を開いた。

嶋田「この映像を見る限り我が日本は負けて国が勃興している。つまり、この戦我が日本は負けて勝ったのではないか？」と扶桑に対して質問した。

扶桑「確かに、日本は負けてそして戦後僅か半世紀足らずで世界第二位の経済大国へと成長します。しかし日本人はその経済成長の変わりに民族としての誇りと自立心を奪われました。その映像がこちらです。」

扶桑が見せたのは戦後日本の負の側面だった。これを見た者の反応は多種多様だった。呆れて空いた口が塞がらない者、怒りで卒倒しそうになる者、疲れたように深く溜め息吐く者だった。

昭和天皇陛下はおもむろに口を開けた。

「貴公らがこの敗戦を阻止するために来た理由は解った。しかし、歴史を変えることは人が触れて良いものなのか？」と。

扶桑「陛下確かに仰る通りです。しかし、この敗戦から日本を救わなければ日本という国は滅亡してしまうのです！今から、ご説明いたします。我々は西暦2115年から来ました。その時代の日本は米国の第51番目の州として併合されています。何故なら、日本は西暦2025年に起きた中国との局地紛争に巻き込まれます。その為日本政府は自衛隊を出動させますが、日本国内の反日日本人勢力や日本共産党や社会民主党や在日韓国人・朝鮮人達の反日勢力が自衛隊の出動を違憲や軍国主義の復活等と言い政府を批判します。それに便乗する形で左翼系・中国共産党よりの新聞社が国民を煽り国民が自衛隊を敵視し始めます、それにより日本政府は事実上の麻痺状態に陥り政府は崩壊が始まります。日本が崩壊を始めると中国が東シナ海の覇権を握ることを看過できなかった米国は日本を保護国扱いにしました。しかし、それを日本人は米国によって救われたと

思い込み日米合併を唱えはじめます。その為2030年日本は米国第51番目の州として併合されました。こうして、日本は滅亡しました。」と扶桑が説明を終えた時木戸幸一内大臣が恐る恐る質問した。

木戸「天皇陛下はどうなられたのですか？」

扶桑「天皇陛下は米国との併合のおり、米国の一市民となります。つまり、天皇制の廃止が行われます。」と木戸に向かって応えた。木戸「こゝ国民は反対しなかったのか？」と声を震わせながら聞いた。

扶桑「少数の反対派勢力はありました。しかし、大多数の国民は日米合併ができるならば致し方なし、として反対しませんでした。」と扶桑が言つと木戸は押し黙った。

扶桑「お分りいただけたと思います。我々は日本を敗戦から救う。その為だけに来たのだと。」

東條「分かった。そう言えば、貴公らの名前を聞いていなかったな。」

扶桑「これは失礼しました。私の名前は扶桑和一です。こっちは私の助手である菊地翔也です。」と説明された、菊地が前に出た。

菊地「初めまして、ご紹介に預かりました菊地です。この時代の人達に負けないように日本を盛りたてて行きますので、どうぞよろしくお願いします！」と説明を終えた時に一人の軍人が飛び込んできた。

軍人「報告します！先ほど三時間程前に不審者達を皇居辺りにて捕らえました。その者達が東條首相に話してくれれば分かるの一点張

りでした……、東條首相の名が出てきたので無下にする事も出来ず、如何いたしましょうか……。」

東條「分かった、その方々は我が日本の国賓だ。絶対に粗相のないように、丁重に遇すのだ。」と軍人に対して命令した。

軍人「はっ！！」と言って出ていった。

東條「これから、戦略全般の見直しをしなければなりません。では扶桑殿改めてよろしく願います。」東條内閣の者達全てが頭を下げた。

そして天皇陛下は「この戦争の責任は全て朕がとる。だから、この国のことを頼む。」と言って天皇陛下も頭を下げた。

扶桑「頭を上げて下さい！畏れ多い。それに天皇陛下には憲法に記されているように戦争責任はありません。それに、そんな事はこの戦争が終わってから考えましょう。」

こうして、未来人との接触は終わった。

この為日本は史実以上に慌ただしく動き始めることになる。

## 接触（後書き）

御意見・御感想・駄目出し等よろしくお願いします。

## 開戦（前書き）

とても短いです。

それに、指摘されたところが改善できたか心配です。  
では、どうぞ！

## 開戦

- 開戦 -

- 北太平洋上 -

第一航空艦隊

旗艦『赤城』艦橋

タッタッタッタッタと艦橋まで駆け足で通信士官が登ってきた。

通信士官「大本営参謀本部より入電が届きました！」

南雲「読め！」

通信士官「はっ！！第一航空艦隊は全艦隊即刻帰還せよ！です！」

この命令には艦橋にいる者達全てが驚いていた。既に日米開戦は避けられないと思っていたからだ。艦橋にいる者達が呆然としている中で南雲が命令を下した。

南雲「全艦隊180度反転これより帰還する、と全艦隊に通達せよ。」

通信士官「はっ！！」

草鹿「長官何故帰還命令が出たのでしょうか？」

南雲「分かん。だが、ひよっとすると米国と交渉が上手くいった



のかもしれないぞ。」

草鹿「そうですね。そう願いたいですね。」

草鹿参謀長がそう言い終わった時赤城以下全艦隊が回頭し終えた。しかし、南雲は一抹の胸騒ぎを感じていた。

- 大本営参謀本部 -

現在大本営参謀本部には、海軍首脳部と陸軍首脳部と東條内閣の大  
臣達と扶桑達が集まっていた。この場で大東亜戦争の基本方針を決  
めるためだ。口火を切ったのは扶桑だった。

扶桑「さて、皆さんが集まりましたので早速始めましょうか。現在  
南雲機動部隊に帰還命令を出しました。これは、米国との戦争を避  
けるためです。その為、あなた方が考えていた対米戦を避け東南ア  
ジアに植民地を持つ英蘭に宣戦布告をします。」

しかし、これに反論した者がいた。連合艦隊参謀の黒島亀人大佐だ。  
黒島「ですが、扶桑さんフィリピンはどうするつもりですか？あそ  
こを獲らないことには、南方との海上輸送路を確保できませんよ。」

扶桑「その点はご心配なくこちらから仕掛けない限り米国は動きません。但し挑発行為はあると思いますがその挑発に乗らなければいいだけです。その間に日本は国力を増強し来るべき戦いに備えるのです。」

不意に連合艦隊司令長官山本五十六が扶桑に質問をした。

山本「来るべき戦いとはどの道米国とは戦争をするのですかな？」

扶桑「恐らく、今大戦に介入したい米国はどのような手を使つても今大戦に介入するでしょう。例えば、日系人の弾圧等が考えられます。」

宇垣「ふん！自由の国が聞いて呆れるな。」

扶桑「米国の自由とは自分達に都合のいい自由ですから。」

東條「話しもまとまつたみたいですね。では英蘭に宣戦布告をする事をここに決定する！」

作戦実施日は十二月八日に決定された。

こちらは米国の日本大使館である。現在日米交渉は野村大使が一人で行っており野村にはその重圧がのしかかっていた。そして、今日は今まで以上の重圧がのしかかっていた。野村大使はハル國務長官に大日本帝国の通告文を手渡すべく、米国國務省を訪れた。日本政府が出した通告文を手渡した。ここに日本は英蘭に宣戦布告をした。ハルはこの通告文に対して遺憾の意を表した。そして、この事をルーズベルトに報告した。ルーズベルトは直ぐにこの事を連邦議会に

報告し、日本に対して宣戦布告をすることを望んだが連邦議会がこれを拒み、ルーズベルトはホワイトハウスに退散するしかなかった。

## 開戦（後書き）

御意見お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4364m/>

---

大東亜戦争～未来からの使者～

2010年10月10日02時22分発行